

国吉康雄の帰朝時の動向

— 国吉自身がスクラップした記事を中心に —

江原久美子

国吉康雄は、1931年から1932年にかけて帰朝した際、自らについて報じた記事をスクラップしていた。現在、そのスクラップ記事原本は福武コレクション国吉康雄アーカイブに保管されている。本稿では、そのスクラップ記事をはじめとした当時の報道記事、また当時発行された各種印刷物や手紙、写真から、帰朝中の国吉康雄の動向を検討した。その結果、国吉康雄は当時の日本の画壇から歓迎され、展覧会が大きな反応を得ていたこと、一方、日本ではアメリカの美術についてほとんど知られておらず、国吉を驚かせたことなどが改めて浮かび上がってきた。

Keywords：国吉康雄，有島生馬，藤田嗣治，福武コレクション国吉康雄アーカイブ，二科会

I. はじめに

1. 本研究の目的と対象

本研究の目的は、国吉康雄の帰朝について、当時の新聞・雑誌記事から、彼の動向を明らかにすることである。

岡山出身の画家、国吉康雄（1889-1953）は、16歳で渡米し、その後、一度だけ帰朝した。1931（昭和6）年、42歳の時のことである。

国吉の帰朝についての従来の評価には、「失敗だったと言えるでしょう」¹あるいは「日本の美術界は国吉に対してあまり温くはなかったようだ」²というものがある。国吉自身、アメリカで1940年に発表した回想の中で、日本滞在中に違和感を感じたことを述べており³、その後、国吉の人生を紹介した論文の多くがこの国吉の回想を紹介している。

しかし、その回想は1940年にアメリカで書かれたものである。当時アメリカで暮らしていた国吉は、日米開戦に近い当時の社会情勢に大きく影響され、日本について否定的に語ったのではないだろうか。国吉本人の回想に基づかない、実際の帰朝時の国吉の行動や日本の人々の接し方はどのようなものだったのだろうか。本稿はこの疑問に基づくものである。

本稿では、福武コレクション国吉康雄アーカイブ⁴

の協力を得て、帰朝時の国吉や日本の人々の姿を報じた当時の新聞や雑誌記事を検討した。その中でも、次に述べる、国吉康雄がスクラップした記事原本が検討の中心となった。

国吉は1931年当時、既にアメリカで著名な画家となっていたため、日本の新聞各紙は彼の帰朝のニュースを大きく取り上げた。その後も翌年2月に離日するまで、国吉の動向はたびたび報道された。

国吉康雄は、日本滞在中、自分に関して報道された記事の一つ一つ集めて切り抜き、スクラップしていた。そのスクラップ記事は、国吉の没後、サラ・クニヨシ夫人から旧国吉康雄美術館⁵に寄贈され、現在は福武コレクション国吉康雄アーカイブに収められている。

岡山大学教育学部では、2018年度的美術教育専修科目「美術理論・美術史演習」(1)(2)（担当：赤木里香子，江原久美子）、および2019年度の夏期集中講義の「美術理論・美術史演習」(1)（担当：赤木里香子，江原久美子）において、同アーカイブに保管されている国吉康雄の帰朝に関する次の資料を読んだ。

- (1)「新聞雑誌切り抜き 1931-32（昭和6-7）年」
（前記、国吉康雄によるスクラップ記事原本を

旧国吉康雄美術館がファイルに収め、表題をつけたもの。資料1はその表紙)

- (2)『YaSuO 画集』(1932年, 京都原色版印刷社)
- (3)国吉康雄から仲田菊代に宛てた書簡, 1931年11月25日付
- (4)国吉康雄に関する写真(サラ・クニヨシ夫人から旧国吉康雄美術館に寄贈されたもの)
- (5)「国吉康雄日本語文献 1931～1939」((1)のコピーのほか, 旧国吉康雄美術館が収集した記事コピーをファイルしたもの)

授業では, 担当教員が一つ一つの資料の確認作業とリスト化をおこない, 学生とともに, 主に(1)の記事原本を精読する作業を行なった。

国吉康雄自身が残したスクラップ記事は, 現在では次の点から貴重なものといえる。

第1に, スクラップ記事の中には, すでに廃刊し

たり他の新聞と統合したりして, 現存しない新聞のものが含まれている⁶。それらは現在となつては検索することが難しくなっている。

第2に, 国吉康雄に関する資料は, アメリカのシミソニアン・インスティテュートが運営するArchive of American Art (AAA) に多く保管されているが, 日本で発行された新聞・雑誌の記事はAAAにはほとんど含まれていない。このため, 帰朝中の国吉に関する日本での資料を探す手段として, この国吉によるスクラップ記事は貴重である。

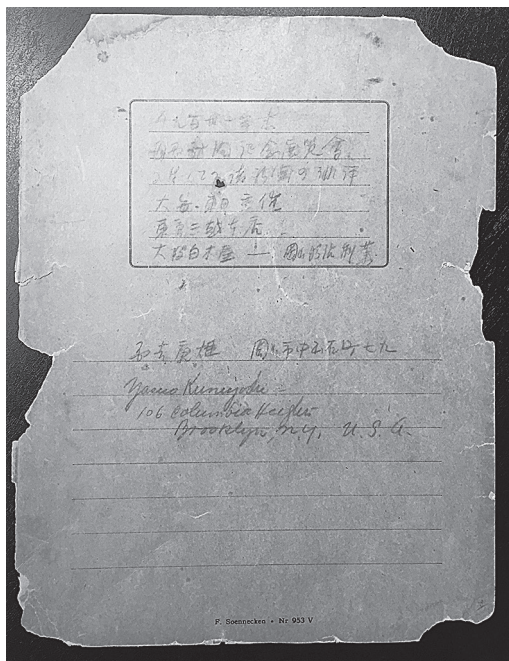
第3に, 国吉がスクラップした記事は, 当然ながら全て国吉自身が読んでいたものである。国吉は, 少なくともスクラップ記事の範囲では, 自分が日本でどのように報じられ, 論じられているかについて認識していた。これは滞日中, そしてその後, 国吉が日本についてどのように考えたかを検討するうえで重要な手がかりとなる。

今回, 以上のような特徴をもつスクラップ記事を読むことにより, 当時の国吉の行動や語った言葉, 交友関係などが改めて詳細に浮かび上がってきた。

なお本稿執筆にあたり調査したところ, (1)～(5)以外に, 帰朝前から帰朝中にかけて国吉のことが掲載された日本の新聞・雑誌記事がいくつか見つかったため, これも本稿の対象とした。

なお, 国吉康雄の帰朝に関して, 後年, 国吉本人や彼の知人がいくつかの証言を残している。たとえば仲田定之助や仲田菊代ほかの人々が, 帰朝時の国吉に会った時の様子を語っていたり, ニューヨークで国吉と親しい友人であった石垣綾子や, 後年, ニューヨークの国吉を訪ねた久保貞次郎は, 帰朝について国吉が語った言葉を紹介している。

だが本稿では, それらの資料は注にとどめ, 1931-1932年に日本で刊行された, 国吉康雄に関する記事, および日本で書かれた手紙, 日本で撮影された写真を検討対象とした。



資料1 国吉康雄によるスクラップ記事のファイル表紙(国吉自筆)

「千九百三十一年末／母國訪問記念展覧會／についての諸新聞の批評／大毎・東日主催／東京三越本店／大阪白木屋——岡山明治製菓／國吉康雄 岡山市中出石町七九 Yasuo Kuniyoshi / 106 Columbus Heights / Brooklyn, N.Y. U.S.A」

ファイル表紙はタテ305mm×ヨコ235mm, おそらく元は水色の厚紙, 表紙下部にF.Soennecken・Nr953V, 裏表紙中央に, F.SOENNECKEN BONNと社社のマークが印刷されている。

内部の各ページはタテ276mm×ヨコ208mm, クリーム色, 各ページに「8008」という模様の透かしあり。ページ数は, 24ページ+表紙および裏表紙。

2. 先行研究

国吉によるスクラップ記事について研究した例としては次のものがある。

本稿が対象としている前記(1)と(5)については, 1993年に発行された『国吉康雄の帰国』という冊子にまとめられている⁷。この冊子は, 「国吉康雄生誕地記念碑」⁸完成を記念して作成されたもので, 国吉康雄の帰朝の概要を伝えている。

この冊子には, 当時, 国吉康雄美術館顧問であった小澤善雄から巻頭言「国吉康雄と日本」が寄稿され, 国吉がスクラップした記事などの複写と文字起こし, 帰朝の間に行われた国吉の展覧会の出品作品

の図版などが掲載されている。

ここで小澤は「国吉自身がみずから集めて切り抜いて貼りつけたスクラップ・ブック」について「たんねんな切り抜きを作る彼の心の中には、自分の作品に対して正しい評価をしてほしいという願いがこめられていたようです。」と述べ、国吉が帰朝にあたり多数の大型作品や、作品を撮影した写真を持ってきたことを指摘したうえで「こうした周到な準備と藤田嗣治の紹介状を持って国吉は日本へやってきました。」と書いている。

小澤はさらに「一方日本側は国吉を受け入れる準備は何もなかったといった方がいいでしょう。国吉康雄はほとんど無名の、作品も作風もわからないアメリカ画家であり、藤田の紹介状や二科会の人々の努力がなかったら、国吉の日本訪問は全く違ったものになっていたと思われます。」「しかしこうした両者の思い入れや受け取り方の違いにもかかわらず、資料を読む限り、日本側もできるだけ国吉を暖かく受け入れようとし、国吉も日本を訪問できたことを率直に喜んでいるようです。そこにはお互いの外交辞令や思い違いや、多少の偏見が含まれていても、もっと大きく包み込む気持ちが通じあっていたようです。」と述べている⁹。

つまりここで小澤は、国吉の帰朝は、国吉自身が企画したものであり、日本の人々にとっては思いがけない突然の出来事だった、と理解している。

また(2)の『YaSuO 画集』について、旧国吉康雄美術館の館報が取り上げたことがある。「この自選画集ともいべき本が何部発行されたかは不明で、その存在は最近までほとんど知られていませんでした。」「この画集は生前に日本で出版した唯一の画集」と紹介したうえで、「この画集は当館開館時に一般の方より寄贈されたものです。」としている¹⁰。同館のライブラリアンであった小澤律子によると、YaSuO 画集は、1990年、旧国吉康雄美術館が開館した当時、岡山の人々から国吉康雄に関する資料が多く寄贈された中に含まれていたとのことで、同画集の寄贈者については不明とのことである¹¹。

II. 帰朝に関して報道された国吉康雄の動向

1. 記事一覧(表1)と、帰朝中の国吉康雄の足取り(表2)

1931年～1932年の国吉の帰朝に関して日本で掲載された記事、つまり前項(1)、(2)、(5)、(6)をまとめたものが【表1】である。1931年4月から1932年2月5日まで、計15紙の新聞、9誌の雑誌ほか印刷物に掲載された合計64本の記事が確認できた¹²。

内訳として、新聞では東京・大阪・岡山にそれぞ

れ拠点をおく全国紙、岡山を基盤とする地方紙、雑誌ではおもに美術雑誌に掲載された。

記事の内容を大きく分類すると、次のようになる。

(〔 〕内は、【表1】中の「本稿記事番号」)

- ・帰郷以前の国吉康雄の人物紹介 [1] [2] [3] (1931年4～5月)
- ・国吉康雄が帰郷したニュース [4] [5] [6] [7] [8] [9] [10] [11] (1931年10月)
- ・東京と大阪での展覧会の予告 [12] [20] [21] [38] [39] [40] [41] (1931年10月～12月)
- ・東京と大阪での展覧会に対する展評、作品評 [18] [19] [22] [23] [24] [27] [28] [29] [32] [35] [36] [37] [43]
- ・岡山でのリトグラフ展の予告および実施のニュース [51] [52] [53] (1932年1月)
- ・国吉が二科会会員に推挙されたニュース [54] [55] [56] (1932年1月)
- ・国吉康雄という人物の紹介 [15] [25] [26] [30] [33] [34] [48] [49] [59] [62] [63] (随時)
- ・国吉康雄自身による談話、寄稿 [42] [44] [45] [50] (随時)

【表2】は、【表1】で一覧した各記事の内容から、国吉康雄が帰朝中、いつ、どこで、何をしていたのかをまとめたものである。

2. 帰朝中の国吉康雄の動向

国吉康雄は日本滞在中、かなり多忙だった。約3ヶ月半の間に個展を3本行い、画集を発行し、自分を主賓とする2つの歓迎会に出席し、その他東京・大阪・岡山で美術関係者と交遊し、新聞や雑誌の取材に対応し、義理の妹など岡山の地元の人々とも親しくつきあった。岡山から離れていても、父親の容体が悪化すると呼び出しの知らせが届くこともあった。

本項では、帰朝中の国吉康雄の動向についての日程順の概略、および資料から読み取れるいくつかの点を述べる。

(1) 国吉の行動の概略

1931年10月14日、シアトルから日本郵船日枝丸で横浜港到着。港で待ち構えていた新聞記者が国吉の姿を撮影し、インタビューする。国吉は帰国の目的や展覧会の予告を述べ、アメリカ美術の状況や、アメリカでの自分の活躍を語る。

10月16日、汽車で岡山駅到着。岡山の人々は駅につめかけ、国吉を歓迎した。岡山の新聞記者が国

吉の姿を撮影し、インタビューする。国吉はその後、岡山市中出石町の自宅で病床の父と再会する。数日間は岡山に滞在すると述べる。

国吉は、10月17日以降の数日間、また11月、12月、1月にも岡山に滞在した。日付は不明だが、岡山では、地元の人々に求められてタコやブドウの絵を描いたり¹³、義理の妹たちと広島県北東部の帝釈峠に行くなど親戚づきあいをしたり¹⁴、「岡山美術研究会」のメンバーと後楽園で記念写真を撮影したりした¹⁵。

11月4日、東京での歓迎会に出席。有島生馬ら画家たち（いずれも二科会会員）が発起人となり、数十名が参加する盛大な会となった。

東京では、日本橋三越で個展準備をおこなったほか、上野の東京府美術館に帝国美術院美術展覧会を見に行っている。

11月16日、日本橋三越の個展プレビューが行われる。作品は「特別室」に陳列され、国吉は作品を見にきた洋画各派の大家を応対した。

11月19日、日本橋三越での個展の招待日。会場は西館4階。国吉は招待者を応対。

11月20日～23日、同個展が一般公開される。国吉は会場で来場者を応対¹⁶。

11月26日、「親父の病気が至急にアラタマツタとの使ひ」を受けたため、岡山に戻る。

12月17日までに大阪での個展の準備。

12月18日～21日、大阪白木屋での個展が開催される。20日には、関西の美術関係者が集まり歓迎会を開いた。この歓迎会は会費制で、一般からも参加可能だった。（実際の参加者数は不明）

1932年1月1日、岡山後楽園に行く¹⁷。

1月16日までに、岡山での石版画展の準備。

1月17日～18日、岡山西大寺町の明治製菓岡山売店にて石版画展が開催される。

1月24日、岡山駅を出発。

1月26日、東京、帝国ホテルで二科会入会の披露会。今秋の二科展のために国吉がアメリカから作品を送ることが発表される。

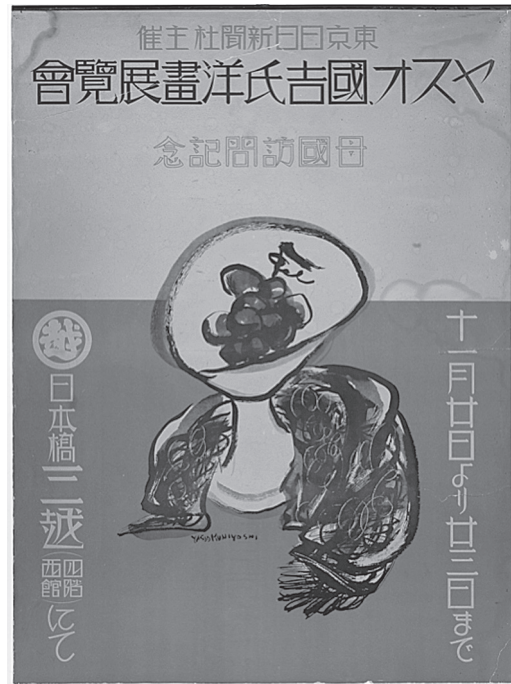
2月1日、国吉は立ち会っていないと思われるが、京都にて画集印刷（発行は10日）。

2月4日、横浜港から日本郵船龍田丸乗船、出航。その後、アメリカへの船中で父の訃報を受け取る。

(2) 3つの展覧会

帰朝中、国吉康雄は次の3つの展覧会を開いた。

- ① 「母国訪問記念／ヤスオ國吉氏洋畫展覧會」
会場：東京日本橋三越 四階西館
会期：1931年11月19日～23日（19日は招待日）



資料2 1931年「ヤスオ國吉氏洋畫展覧會」ポスター

「東京日日新聞社主催／ヤスオ國吉氏洋畫展覧會／母國訪問記念／十一月廿日より廿三日まで／日本橋三越四階西館にて」

Smithsonian American Art Museum, Gift of Mrs. Nathaly Baum

主催者：東京日日新聞社

展示作品：油彩画29点、リトグラフ数十点

② 「ヤスオ國吉氏洋畫展覧會」(①の巡回展)

会場：大阪白木屋七階

会期：1931年12月18日～21日

主催者：大阪毎日新聞社

展示作品：油彩画29点、リトグラフ数十点

③ 「国吉康雄石版画展」

会場：明治製菓岡山売店 楼上

会期：1932年1月17、18日

主催者：中国民報社

展示作品：リトグラフ数十点

上記①②の国吉康雄の個展はどのようなものだったのだろうか。①の日本橋三越では国吉の個展の会期中、ほかに3本の展覧会が同時に行われており、その前後にも絶え間なく美術展が行われている¹⁸。日本橋三越は当時、東京における最も大規模な美術展覧会場のひとつだったといえる。そして三越では、新聞社主催の展覧会であっても、作品を展示して見せるだけでなく、作品の販売も行っていた（[24]

には「出品物の希望者は三越美術部へ申し込めばよい」とある)。②の大阪白木屋の個展は、日本橋三越での個展が巡回したものであり、同じ形態で作品販売もしていたと推測される。

一方③の岡山での石版画展の会場は、明治製菓岡山売店だった。これは明治製菓が当時全国で展開していた喫茶店のひとつであり、岡山売店の二階は「小集会は、たいていここで催された」¹⁹とされる集会場だった。この喫茶店兼集会場には、作品の販売機能はなかったと思われる。

ちなみに岡山の百貨店、天満屋にも当時から画廊はあったが、このときは別の展覧会が開かれていた²⁰。

岡山での石版画展について、岡山の画家 吉田苞は主催者である中国民報において「その作品が郷土人士の前に鑑賞されないといふことは寂びしいことだし、またいつ鑑賞されるやらそれもわからないので、畫伯の偉大なる業績の片鱗にでも接したいといふ熱切なる希望を満たすべく畫伯歸米の日も迫り既に荷造りされた油繪を除き、石版畫だけ展観することとなつた」と述べた（[52]）。ここでは、石版画展が国吉の帰米直前に決まったように言われているが、他の媒体では11月にすでに岡山での展覧会について報じられている（[28]）。岡山での石版画展については、10月16日の岡山帰郷の際にはまだ話題に出ていない（[9] [10] [11]）ので、国吉が岡山に滞在中に石版画展の話がまとまったことが推測される。

いずれにしても当時、それぞれの都市で洋画が展示できる場所として、モダンで多くの人々を集める



資料3 1931年1月18日、中国民報「本社後援 國吉畫伯の石版畫展 けふ限り（岡山市西大寺町／明治製菓楼上）寫眞は會場」（[53]）

最大級の舞台が国吉の展覧会のために準備されたといえる。

(3) 作品は売れたのか？

東京と大阪での個展において、国吉の作品は売れたのだろうか。

国吉自身は後年、ニューヨークを訪ねてきた美術評論家の久保貞次郎に対して「日本では二点賣れただけだ」と語っている²¹。当時の三越および白木屋の売立記録は今のところ確認できていないが、他の資料から、少なくとも1点は、この帰朝中に東京で売れたことが特定できる。

それは「横たわる女」という油彩画で、現在は公益財団法人石橋財団が所蔵している。この作品は1931年の東京と大阪の国吉展で展示され、その後、1932年2月刊の『YaSuO画集』に「東京某氏蔵」と記載されている（[64]）。「横たわる女」が、日本で購入され、東京のコレクターによって所蔵された最初の作品の一つということは確実である。

石橋財団コレクションのカatalog（1996）では、この作品の来歴は「三井高精，東京：石橋正二郎：石橋財団」となっている²²。三井財閥の当主，三井高精男爵は、1940年には「その蒐集せる日本現代洋風画，及び近代西洋画を展観する為，麹町区平河町に三井洋画コレクションを開設」²³した美術品収集家である。三井が1931年、「横たわる女」を購入したかどうか、当時の売立記録を今後調査したい。

(4) 帰朝中の交遊

国吉の帰朝中、東京と大阪で国吉のための歓迎会が開かれ、岡山でも岡山美術研究会の人々が国吉を囲んで集まった。離日直前には、国吉が二科会の会員となったことを披露する会が開かれた。

また彼の展覧会には多くの美術関係者が訪れ、その中の何人かは、作品や展覧会を批評する記事を書いた。

【表1】の新聞、雑誌等に名前が出ているのは次の31名である。

- 有島生馬：画家，二科会員 [14] [15] 他
- 石井柏亭：画家，二科会員 [14]
- 藤島武二：画家，二科会員 [14]
- 岡田三郎助：画家 [14]
- 長谷川昇：画家 [14]
- 宇野千代：作家，デザイナー [14]
- 中條精一郎：建築家 [14]
- 和田三造：画家 [20]
- 中川紀元：画家，二科会員 [20]

正宗得三郎：画家，二科会員 [20]
三宅克己：画家 [20]
東郷青児：画家，二科会員 [20]
仲田菊代：画家²⁴
鹿子木孟郎：画家 岡山出身，国吉とはニューヨークで会ったことがある。[39]
国枝金三：画家，二科会員 [39]
黒田重太郎：画家，二科会員 [39]
鍋井克之：画家，二科会員 [39]
霜鳥正三郎：画家 ニューヨーク滞在時，国吉と旧知。[39]
西村真琴：植物学者，大阪毎日新聞論説委員。[39]

以下は，帰朝前・帰朝中に記事を書いた人々である。

東京日日新聞 在ニューヨーク大原特派員 [1]
蜂谷信太郎：海軍少尉。[2] [3]
小洲生 [18]
素心庵（外狩素心庵）：美術評論家。[19]
児島善三郎：画家 [22]
金子義男：東京日日新聞記者 [25] [33]
柳亮：画家，パリ滞在時，国吉と旧知。[30]
清水登之：画家。ニューヨーク滞在時，国吉と旧知。[34]
萩生田 生 [35]
川路柳虹：美術評論家。[37]
金子九平次：彫刻家。[48]
西田武雄：版画家。[49] [59]
吉田苞：画家，岡山在住。[52]

以上のように，二科会，日本美術院の重鎮，新聞や雑誌での発言力の大きい人々が国吉を歓迎し，注目していたことがわかる。

(5)有島生馬の働きかけ

（二科会員への推挙・国吉展の企画）

二科会は，文部省美術展覧会（文展）に反抗した美術家たちが，1914年に立ち上げた在野の公募団体である。年に一度「二科美術展覧会」を開き，毎回，審査の上，入選とされた約500名の作品が展示されていた。しかしその「会員」となるためには「推挙」が必要で，1933年時点では絵画部の会員は国吉を含め25名，彫塑部は3名であった²⁵。

二科会の記録では，国吉康雄は1931年に二科会の会員となり，その後1942年の「二科美術展覧会」図録でも，国吉がその時点でも会員だったことが確認できる²⁶。

1932年1月26日，東京帝国ホテルで国吉が二科

会員となったことを披露する会が行われた。その会では，国吉が「秋の二科展にアメリカから作品を送る」ことが発表された。（[55] [56]）

1932年秋の二科美術展覧会には，国吉の「サーカスの女」が出展された²⁷。この作品は1990年刊の国吉康雄のカタログレゾネ「YASUO KUNIYOSHI ネオ・アメリカン・アーティストの軌跡」に掲載されている「サーカスの女玉乗り」（No.163）と特定できる。1930年に制作されたこの作品は1931年の日本での個展では展示されておらず，二科展には「既に本邦に於て発表したることある作品は受理せず」という規則もあった²⁸ことから，披露会での発表のとおり，後日，国吉がアメリカから送ってきたと考えられる。

その後，二科会美術展覧会は1943年まで毎年開かれたが，国吉が出品したのは1932年だけである。

二科会をはじめ，戦前の日本の美術団体は分裂や会員の移動など，激しい変動があった。また，1932年にアメリカに戻った国吉は，日本の画家たちが団体を作って活動をしていることに冷静な批判を加えている²⁹。1935年には，正宗徳三郎がニューヨークでの二科会展を企画し，国吉に仲介を持ちかけるなどの動きもあった³⁰。それらの日本の画壇の動きに対して，国吉がどのように考え，どのように接していたかについては，別稿で述べることにする。

そもそも，アメリカで画家として活躍していた国吉康雄が帰郷した動機は何だったのだろうか。また，なぜ1931年の秋というタイミングだったのだろうか。

帰朝当時の報道では，すでにその目的が「父の見舞い」と「個展の開催」だったことが伝えられている。国吉の帰朝を最初に予告した [1] では，「國吉君は（老いて病床にある）父君に會ふのが目的で，画壇の仕事は第二だといふ」としている。国吉は1931年10月，日本に到着するとすぐに岡山で父親と再会し，その父は，翌年2月に亡くなっている。

1920年代にアメリカで国吉と親交のあった清水登之は，帰朝前から国吉が父親思いであったことを紹介している。（[34]）国吉にとって死期の近い父親に会うことは大きな目的であり，それは叶えられたことになる。

国吉の帰朝のもう一つの目的である日本での個展を企画したのは，二科会の重鎮，有島生馬だった。彼は，展覧会の数日前，11月13日に主催者である東京日日新聞に「世界人としての國吉康雄畫伯 アメリカよりの歸朝を迎へて」という文章（[15]）を載せ，これが国吉の日本での論調の基調となった。[18] には「二科会の重鎮，有島生馬氏の斡旋で」

とある。これは当時の日本画壇ではひろく共有されていた認識だっただろう。

有島は[15]において、藤田嗣治から国吉康雄を紹介する手紙を受け取ったこと、その内容は国吉を激賞するものだったことを述べ、読者に対して、藤田嗣治というスター画家の名前を使って読者の興味を引こうとしている。

有島は1939年「中央美術」への寄稿でも、藤田嗣治から送られた紹介状について書いている³¹。ここでは、藤田嗣治がニューヨークで国吉に出会い、1931年2月に日本の有島生馬に紹介状を書いたこと、そこには非常に具体的な依頼事項が書いてあったことを紹介している。藤田からの紹介により、国吉に興味をもった有島が日本での展覧会を企画したうえで、帰朝の話为国吉にもちかけたことがうかがえる。

国吉の帰朝は、有島生馬による日本での段取り、つまり東京日日新聞社に展覧会主催を交渉し、日本橋三越という場所を手配し、日取りを決めるといった動きによって実現し、そして帰朝時の報道の論調は、有島によってリードされた。

(6)国吉作品に対する主な論調

日本で初めて国吉作品を見た人々は、どのように論じたのだろうか。たとえば次のようなキーワードをあげることができる。

「フランス風」

「アメリカのフジタ」

「だが心は日本人」

次項で紹介するように、国吉康雄は日本滞在中、再三、アメリカでの美術の状況やアメリカでの自らの

の活躍を述べていた。にも関わらず、国吉とアメリカ美術と関連づけて語っているのは、柳亮([30])、西田武雄([49][59])、川路柳虹([37])だけである。有島生馬もアメリカ美術については全く語らないまま「各国のいわゆる國民美術はその幕を閉じて終わった」と述べるなど、次に述べる国吉自身の認識とはかけ離れていたことがわかる。

(7)国吉自身が語ったこと

国吉自身は、日本で何を語ったのだろうか。

国吉は、1931年10月の帰朝直後、自分を紹介するために、まずアメリカでの美術の隆盛と、自分がその中で活躍していることを述べ、その後も折に触れてアメリカの美術が世界をリードすると言っている。([4][5][6][7])

その後「歸朝所感」([42])、「故國を訪ねて」([44])では、「自分は日本人だ」という旨を語りつつ、あわせて必ずアメリカの美術の状況について丁寧に紹介している。

国吉が、彼の考えを最も率直に語っているのは『美術新論』1932年1月号([45])においてである。国吉はここで「アメリカの美術は日本に知られてゐないと云ふ事は聞いてゐたが、あまりに知られてゐないのに驚きました。」と語っている。そして日本滞在中、自らが発信することのできる媒体では必ずアメリカの美術の紹介に努めた。

日本でアメリカの美術が知られるようになり、美術雑誌などで取り上げられるようになるのは、1932年以降である。その後は、野田英夫などアメリカで活躍する日本人画家と、日本に在住する画家たちとの交流が盛んになっていく。

【表1】1931～1932年の国吉康雄の帰朝に関する記事

本稿番号	収集者	掲載紙・誌名	掲載年月日 (雑誌は発行日)	筆者	見出し(原本改行部分は「／」)	写真・画像
1	国吉	東京日日新聞	1931年4月29日	在ニューヨーク大原特派員	世界人の畫廊／米國畫壇に氣を吐く／ヤスオ國吉／グリニツチの村の兒	国吉康雄とキャサリン・シュミット顔写真
2		山陽新報	1931年5月8日	蜂谷信太郎	米畫壇の人気者／ヤスオ國吉君／(一)	なし
3	国吉	山陽新報	1931年5月9日	蜂谷信太郎	米國畫壇の人気者／ヤスオ國吉君／(二)	なし
4	国吉	報知新聞	1931年10月14日	(横浜支局電話)	最高名譽を得／國吉畫伯歸朝／廿六年振り／で米國から	「國吉畫伯」
5	国吉	東京日日新聞夕刊	1931年10月15日		全米に鳴る／國吉畫伯歸朝／本社主催で展覧會	国吉顔写真(7からの切り抜き)
6	国吉	國民新聞	1931年10月15日		米畫壇の寵兒／國吉氏・歸る／製作百餘點を携へて	なし
7	国吉	大阪毎日新聞	1931年10月15日		米國第一の／邦人畫家／國吉康雄氏歸る／夫人も一流の風景畫家／東京、大阪で展覧會	「歸朝した國吉康雄畫伯」(本社電送)
8	国吉	東京朝日新聞 実際には同日の東京朝日新聞にこの記事はない。国吉の誤記か。	1931年10月15日		「戀の勝利」と／畫壇の譽を得て／萬國展で特選を勝ち得た／國吉康雄畫伯歸る	なし

9	国吉	中國民報	1931年10月17日		故郷に錦の國吉畫伯／廿六年振に歸岡／岡山工業の卒業生／米國に高いその畫名	なし
10		大阪朝日新聞（岡山版）	1931年10月17日		變つた岡山の姿／想ひ出は懐し／廿六年振りに米國から／國吉康雄畫伯歸る	なし
11	国吉	山陽新報	1931年10月17日 夕刊		米畫壇の明星／岡山に歸る／二十六年振で生家へ／驛頭に夥しい出迎へ	「歸つた國吉康雄氏」 写真
12	国吉	婦人フォーラム	1931年10月25日		（見出しなし，口絵図版と本文記事のみ）	「サーカスの娘」 「國吉畫伯自畫像」
13	アーカイブ	東京日日新聞	1931年11月5日		國吉畫伯／の歓迎會	なし
14	国吉	読売新聞	1931年11月6日		二十六年目で歸朝した／洋畫家國吉氏の歓迎會	歓迎會のテーブルを囲む参加者の写真
15	国吉	東京日日新聞	1931年11月13日	有島生馬	＜学藝＞世界人としての／國吉康雄畫伯／アメリカよりの歸朝を迎へて（内容は17, 61と同文）	「アトリエにおける國吉畫伯」写真（17, 49と同じ）
16	アーカイブ	國吉康雄洋畫個展（展覧会目録）	1931年11月19日		昭和六年十一月十九日ー廿三日／東京日本橋三越四階西館／國吉康雄洋畫個展／主催 東京日日新聞社	なし
17	アーカイブ	ヤスオ國吉氏洋畫展覧会（展覧会パンフレット）	1931年11月19日	有島生馬	世界人としての國吉康雄畫伯／アメリカよりの歸朝を迎へて	表紙に國吉康雄上半身写真（15, 49と同じ）
18	国吉	國民新聞	1931年11月19日	小洲生	國吉氏の／個展／來春二科會員に／推される作家	「裸婦」
19	アーカイブ	中外商業新報	1931年11月19日	素心庵	國吉康雄氏／母國訪問展	「凭れかゝる裸婦」
20	国吉	東京日日新聞	1931年11月19日		全米を風靡した／名聲をまのあたりに／本社主催 國吉畫伯の洋畫展	なし
21	国吉	東京日日新聞	1931年11月19日		米國よりの歸朝を迎へて／ヤスオ・國吉氏洋畫展覧會（展覧会広告）	なし
22	国吉	東京朝日新聞	1931年11月20日	兒島善三郎	國吉康雄／氏個展評	なし
23	国吉	都新聞	1931年11月20日		＜美術界＞ヤスオ國吉氏／母國訪問記念展	なし
24	国吉	日本評論新聞	1931年11月20日		＜今日の百貨店＞母國訪問を記念して／國吉氏洋畫展／浴後の裸女等展覧	なし
25	国吉	東京日日新聞	1931年11月20日	金子義男	ヤスヲ・クニヨシと／その畫業 上	「禁断の果實を盗まんとする子供」
26	国吉	東京日日新聞	1931年11月21日	金子義男	ヤスヲ・クニヨシと／その畫業 二	なし
27	国吉	時事新報	1931年11月21日		國吉康雄氏／個展	なし
28	国吉	毎夕新聞	1931年11月22日	（良）	國吉康雄氏個展	なし
29	国吉	駿台新報	1931年11月22日		二人の子供（於三越ギヤラリー）國吉康雄	「二人の子供」
30	アーカイブ	アトリエ 第8巻第12号（1931年12月号）	1931年12月1日	柳亮	ブラボー・クニヨシ／一國吉康雄君へ贈る書簡一	「新築のアトリエの前で日向ぼっこする國吉氏とカサリーンヌ夫人」写真 「花束とストープ」 「籐椅子に凭る女」
31	アーカイブ	アトリエ 第8巻第12号（1931年12月号）	1931年12月1日		アトリエ・グラフ／「國吉康雄氏の歸朝」	「レインボーグリルに於ける歓迎會」写真／「三越の展覧會場に於ける準備中の國吉氏」写真
32	アーカイブ	美之國 第7巻第12号（1931年12月号）	1931年12月1日		＜展覧會記＞國吉康雄氏個展	なし
33	アーカイブ	美術新論 第6巻第12号（1931年12月号）	1931年12月1日	金子義男	ヤスヲ・クニヨシの事	「自畫像」（本展出品） 「静物」（國吉氏個展出品）
34	アーカイブ	みづゑ 第322号（1931年12月号）	1931年12月3日	清水登之	ヤスオ國吉君	なし
35	アーカイブ	みづゑ 第322号（1931年12月号）	1931年12月3日	萩生田 生	國吉康雄氏の個展に就て	なし

国吉康雄の帰朝時の動向

36	アーカイブ	みづゑ 第322号 (1931年12月号)	1931年12月3日	國吉康雄	(「グラビヤ版」および「別刷写真版」)	「静物」(石版) 「巴里のキャフエ」(石版) 「巻頭」(石版) 「花束とストロブ」(油絵) 「禁断の實を盗む小供」 「静物」「風景」「裸婦」
37	国吉	大阪朝日新聞	1931年12月6日	川路柳虹	1932年への展開／美術界／國吉康雄氏 その他の／海外における成果	なし
38	国吉	サンデー毎日	1931年12月13日		米畫壇の鬼才／國吉康雄畫伯の歸朝みやげ	「浴後」 「花のある室内」 「桃のある静物」 「力業の女と子供」
39	国吉	大阪毎日新聞	1931年12月18日		ヤスオ・國吉／畫伯歡迎會／記念展はけふから	なし
40	国吉	大阪毎日新聞	1931年12月18日		日本が生んだ世界的存在／ヤスオ・國吉氏 洋畫展覽會／主催 大阪毎日新聞社／十八日より廿一日まで 「七階」	なし
41	国吉	大阪毎日新聞	1931年12月18日		ヤスオ・國吉氏洋畫展／十八日－廿一日	なし
42	国吉	大阪毎日新聞	1931年12月19日	國吉康雄	<学藝>歸朝所感／故郷へかへる	「自畫像」
43	国吉	大阪朝日新聞	1931年12月21日	春山	國吉康雄氏／洋畫個人展	國吉顔写真
44	アーカイブ	アトリエ 第9巻第1号 (1932年1月号)	1932年1月1日	國吉康雄	故國を訪ねて	なし
45		美術新論 第7巻第1号 (1932年1月号)	1932年1月1日	國吉康雄	アメリカの美術界	展示された自作品の前に立つ吉康雄写真
46		美術新論 第7巻第1号 (1932年1月号)	1932年1月1日		美術界雑誌／昭和六年十一月／國吉康雄氏歡迎會	なし
47		美術新論 第7巻第1号 (1932年1月号)	1932年1月1日		美術界雑誌／昭和六年十一月／國吉康雄氏個展	「羽の帽子」
48	アーカイブ	美之國 第8巻第1号 (1932年1月号)	1932年1月1日	金子九平次	輝ける國吉康雄君	「立てるは國吉康雄氏」写真
49	アーカイブ	みづゑ 第323号 (1932年1月号)	1932年1月3日	西田武雄	畫工志願 (九)	「國吉康雄氏」写真(15, 17と同じ)
50		東京朝日新聞	1932年1月10日	國吉康雄	<絵画>歸朝身邊風景 (7) (カット絵のみ)	天使を描いたカット絵(手書き文字“HAPPY NEW YEAR”)
51	国吉	中國民報	1932年1月16日		本社後援 郷土に飾る畫展二つ／輝く世界的畫人／米國畫壇の寵兒・國吉康雄氏／十七, 八両日作品を公開 (入場無料)	「世界人クニヨシ」として「國吉康雄畫伯とカソリン夫人」写真, 「三人の踊り子」
52	国吉	中國民報	1932年1月17日	吉田苞	國吉畫伯 石版畫(リソグラフ)展 今, 明両日(午前九時より午後九時まで)／本社後援(入場無料) 良き収獲／國吉康雄畫伯を讃へる／吉田苞畫伯	「サーカスの球乗り」(リトグラフ)画像 ただし掲載時には画像タイトルなし
53	国吉	中國民報	1932年1月18日		本社後援／國吉畫伯の石版畫展／けふ限り(岡山市西大寺町／明治製菓楼上) 寫眞は會場	岡山での石版画展の会場写真
54	アーカイブ	紙名不明	1932年1月24日以前		國吉康雄畫伯 二科會員に推薦	なし
55	アーカイブ	東京日日新聞	1932年1月27日		國吉畫伯を二／科會員に推薦	なし
56		読売新聞	1932年1月27日		「アメリカの藤田」國／吉畫伯二科新會員に	なし
57		朝日新聞	1932年1月27日		國吉氏二科會員／に推舉さる	なし
58		美術新論 第7巻第2号 (1932年2月号)	1932年2月1日	国吉康雄	私の繪(坂本繁二郎等22名の画家の一人として, 自作「サーカスの女」の制作について語っている)	「サーカスの女」

59	アーカイブ	みづゑ 第324号 (1932年2月号)	1932年2月3日	西田武雄	<畫工志願10>ヤスオ國吉とアメリカ	なし
60	アーカイブ	東京日日新聞	1932年2月5日		國吉畫伯米國へ歸る	なし
61	アーカイブ	YaSuO 畫集	1932年2月10日	有島生馬	世界人としての國吉康雄畫伯／アメリカよりの歸朝を迎へて15, 17と同文	なし
62	アーカイブ	YaSuO 畫集	1932年2月10日	黒田重太郎	國吉君の藝術に就て	なし
63	アーカイブ	YaSuO 畫集	1932年2月10日	霜鳥正三郎	立志傳中の國吉君	なし
64	アーカイブ	YaSuO 畫集	1932年2月10日	國吉康雄	(油彩画24点, 石版画7点の図版)	(略)

注) 表は江原作成。

収集者欄の「国吉」は国吉康雄（スクラップしていた記事原本）、紙名と日付は国吉が記入した表記による。「アーカイブ」は旧国吉康雄美術館が収集し、現在は福武コレクション国吉康雄アーカイブに収められているコピー、ただし61～64のYaSuO画集は同アーカイブに原本がある。収集者欄が空欄のものは本研究で存在が確認されたもの。／写真・画像欄の「」内は、掲載時の作品あるいは写真のキャプション。

【表2】1931～32年、帰朝中の国吉康雄の足取り

日にち（曜日）	国吉の行動ほか状況	場所	記事概略	掲載紙・誌
1931（昭和6）年 10月14日（水）	横浜港着	横浜	10月14日午前11時、シアトルから日枝丸で26年ぶり帰朝。カーネギー万国博覧会に出展していた静物画が入賞した知らせが航海中に届いた。石版画60点、油絵29点の展覧会を日本で開く予定。	4
			14日正午、郵船日枝丸で帰朝。 インターナショナルに出品した作品が特賞受賞。特賞はピカソやマチスのみで、日本人は初。6×4フィートくらいの油絵を29点持ってきた。本人談「展覧会をするための帰朝だが、実は病父を見舞うのも目的」。展覧会情報。	5
			14日正午、シアトルから日枝丸で突然帰国。カーネギー万国展で最高賞を獲得。岡山工業学校を卒業。郷里訪問の帰朝で、個人展を開くべく油絵29点、版画60点を携えてきた。	6
			14日正午シアトルから横浜に入港の郵船日枝丸で帰朝。26年前岡山工業学校を卒業後、語学習得のために渡米した。現在は一流の画家。カーネギー・インターナショナルで特賞をもらった。夫人紹介。グリニッチビレッジで13年前に結婚した。いま住んでいるのもグリニッチビレッジ。本人談「何しろ貧乏なので妻もつれて来られない」	7
			14日午前、日枝丸で帰朝。26年前岡山工業学校を卒業後、英語勉強の目的で渡米したが、勉学を続けるうちアメリカ人教師から画才を認められ勧められるままに画筆を握りリーグを卒業した。夫人との結婚の経緯。表現派中のリアリズムで一名（一つの名前として）国吉ズム（ママ）と呼ばれている。夫人は仕事の都合で同行せず。	8
10月15日（木）	横浜あるいは東京を出発	横浜か東京		
10月16日（金）	岡山着、父親のいる自宅へ。	岡山	14日横浜着、16日午前11：46に岡山着。親類や町内から迎えにきた数十名とともに我が家に向かった。本人談「岡山工業を卒業すると直ぐ英語研究のため單身渡米」「生れつき絵畫が好き」「数日岡山に滞在し直ぐ上京しますが本年の末か来年1月ごろ渡米する考へですから渡米前にまた岡山に立ち寄ります」	9
			16日午後1：16、思い出多き人たちに出迎えられ26年ぶりに岡山の土地を踏んだ。本人談「岡山工業の染色科（ママ）を卒業、英語を勉強したいと思つて渡米」「繪の方は好きな道でもあり・・専門にやつた」「大阪で展覧會を開く前に二、三日間岡山市中出石の父の許に滞在、アメリカに歸るのは十一月下旬か十二月上旬の豫定」	10
			16日11：46に岡山駅に到着。いでたちは瘦軀にツイード背広を無造作に、ソフト帽をあみだに、一見ひょうひょうとして天涯孤独のボヘミアン。万国博覧会で受賞。画風は表現派に似ている。父の病氣はリユーマチ。	11
10月17日（土）～ 11月3日（火）				
11月4日（水）	帰朝歓迎会出席	東京	帰朝歓迎会が、4日午後6時から有島生馬、石井柏亭、藤島武二、岡田三郎助、長谷川昇の5画伯主催で麹町区山下町大阪ビル内レインボーグリルで開かれた。40名参加し盛会。	13

国吉康雄の帰朝時の動向

			大阪ビル レインボーグリルで帰朝歓迎会。洋画壇ならびに関係者数十氏参加。(写真に石井柏亭、宇野千代、国吉康雄、中條精一郎、藤島武二、有島生馬)	14
			岡田三郎助、藤島武二、長谷川昇、石井柏亭、有島生馬等諸氏の発起にて4日午後6時より、東京麹町区内幸町大阪ビル、レインボーグリルに於て歓迎会。	31
11月5日(木)～ 11月14日(土)				
11月15日(日)	(展示準備か)	東京		
11月16日(月)	日本橋三越での個展、 プレビュー	東京	特別室に総出品数十点を陳列。洋畫各派の大家が来て作品について批判したが、優れた作品に対する意見は一致した。	18
11月17日(火)				
11月18日(水)				
11月19日(木)	個展、招待日	東京	和田三造、石井柏亭、有島生馬、中川紀元、正宗得三郎、三宅克己、東郷青児はじめ諸名士の来場ですこぶる活況。いずれも非常な好評。石版画数十点は鑑賞者に多大の感銘を与えた。	20
11月20日(金)	個展、一般公開	東京		
11月21日(土)	個展	東京		
11月22日(日)	個展	東京		
11月23日(月・祝)	個展	東京		
11月24日(火)	(展覧会撤収か)	東京		
11月25日(水)	仲田菊代宛の手紙「親父の病気が至急にアラタマッタとの使ひで明夜二十六日郷里へ出(ママ)ちます。」	東京		
11月26日(木)	(東京から岡山へ移動か)	東京→岡山		
11月27日(金)～ 12月16日(月)				
12月17日(木)	(展示準備か)	大阪		
12月18日(金)	大阪白木屋にて個展	大阪	国吉康雄氏の個展を大阪白木屋で見る。本年画界の収穫として特筆すべき。石版画数十点も面白い。	42
12月19日(土)	個展	大阪		
12月20日(日)	個展 歓迎会出席	大阪	(予告として)大阪白木屋で、国吉の作品を鑑賞するとともに歓迎会を20日8Fの食堂で開く。会費1円。一般解が愛好者の来会を希望する。(歓迎会発起人：鹿子木孟郎、国枝金三、黒田重太郎、鍋井克之、霜島正三郎、西村真琴)	39
12月21日(月)	個展	大阪		
12月22日(火)	(展覧会撤収か)	大阪		
12月23日(水)～ 12月31日(金)				
1932(昭和7)年 1月1日(金・祝)	岡山で後樂園訪問	岡山		
1月2日(土) ～1月15日(金)				
1月16日(土)	(展示準備か)	岡山		
1月17日(日)	石版画展(岡山西大寺町明治製菓売店楼上にて)	岡山	画伯帰米の日も迫り既に荷造りされた油絵を除き、石版画だけ展観することとなった。 吉田苞「パリの画風を持ち、世界人である国吉の作品を鑑賞する機会を得た。石版画によって画風は十分味わえる。国吉を知っている人にも知らない人にも鑑賞上のよい収穫だ。」	52
1月18日(月)	石版画展	岡山		
1月19日(火)	(展覧会撤収か)	岡山		
1月20日(水) ～1月23日(土)				
1月24日(日)	岡山駅を出発	岡山	午前11:20発の列車で出発、帰米の途に上る。	54
1月25日(月)				
1月26日(火)	二科会より会員として推薦される。帝国ホテルでの披露会出席。	東京	国吉は26日二科会から会員に推薦した旨発表した。今秋の二科展からアメリカより作品を発表するはずで、今後は国吉の斡旋で日米画壇(油絵)を交換する計画もある。	55

			今回二科会員一同の推挙で同会の新会員として入会、帝国ホテルで披露会を催した。今秋の二科出品はアメリカから送ることになっている。	56
			二科会は今回新たに国吉康雄氏を会員に推挙した。	57
1月27日(水)～ 1月31日(日)				
2月1日(月)	(「YaSuO画集」印刷)			
2月2日(火)				
2月3日(水)				
2月4日(木)	龍田丸にて横浜港発	東京→ 横浜	二科会員の見送りを受けて4日午後0時半東京駅発、同3時横浜出帆の龍田丸で帰米の途についた。	60
2月5日(金)～ 2月9日(火)		船中		
2月10日(水)	(「YaSuO画集」発行)	船中		
	(乗船中、父の訃報を受け取る)	船中		

(表2は江原作成。「掲載紙・誌」欄の番号は、表1の「本稿番号」と対応している。)

Ⅲ. 結論と今後の課題

以上、当時の記事と国吉の足取りをもとに、帰朝時の国吉の動向や日本人の反応をみてきた。

当時、国吉の大規模な展覧会が東京と大阪に巡回し、大勢の人が見に来て、多くの新聞・雑誌が報じた。また、美術界の重鎮が多く集まって歓迎会が開かれた。国吉は二科会員にも推挙され、そのあと十数年続く二科会とのつきあいがはじまった。岡山では父や義理の妹ら、親戚づきあいも再開した。

小澤は「藤田の紹介状や二科会の人々の努力」を指摘しつつも「日本側は国吉を受け入れる準備は何もなかったと言った方がいいでしょう」と述べた³²が、帰朝に関する記事からは、有島生馬がかなり動き、三越という当時の展覧会会場としては最も華やかな、人が集まる場所を用意し、事前広報を盛り上げ、二科会をはじめとした美術関係者に声をかけていたことがわかった。

小澤が述べたこととは異なり、国吉の帰朝は、彼が独自に企画して日本に飛び込んできたものではなかった。そうではなく、日本の美術関係者が企画を準備し、国吉にもちかけ、それに国吉が乗ったものだといえる。

国吉の帰朝について、今泉は「日本の美術界は国吉に対して温くなかった」、小澤は「失敗だった」

と断じた。今回の研究からはそれとは異なる事実がわかったが、今泉や小澤が同時に指摘する、当時の日本ではアメリカ美術が知られておらず、国吉を落胆させたことも、当時の記事から明確に浮かび上がってきた。

この帰朝は、日本国内の人々が国吉が交流を始めた契機となった。1932年以降、この交流はさらに続いていくが、その変遷については今後の研究課題としたい。

また本稿では詳細を述べなかったが、日本人は実際にどの作品を見たのか、展覧会の作品目録、『YaSuO画集』の掲載作品の特定結果についても別稿で述べたい。

謝辞：

本研究への、福武コレクション国吉康雄アーカイブのご協力に感謝いたします。

本稿執筆にあたり貴重なご助言をくださった岡山大学大学院教育学研究科、赤木里香子教授に心より感謝いたします。また「美術理論・美術史演習」とともに資料精読にあたった学生の皆さん(2018年：宮田寛子、中本瀬莉菜、2019年：宮田寛子、石岡美樹、竹下七海)に感謝します。

武總一郎氏が所有する国吉作品コレクションおよびアーカイブを指す。このアーカイブには、1990年から2003年まで岡山市内で運営されていた「国吉康雄美術館」が収集・管理していた資料が引き継がれ、保管されている。その主な内訳は、

- ・国吉康雄自身が収集していた書籍
- ・日本およびアメリカで国吉に関して報道された記事のコピー

¹ 小澤善雄(1996)『飛翔と回帰』、日本文教出版株式会社、1996年、p.121

² 今泉篤男(1954)「国吉康雄のアメリカ画壇における足跡」、『国吉康雄遺作展』図録、1954年、国立近代美術館、毎日新聞社、p.7

³ Kuniyoshi, Y. (1940) “East to West” *Magazine of Art*, vol 33, no.2 (February 1940) pp.72-83

⁴ 「福武コレクション国吉康雄アーカイブ」とは、福

- ・写真
- ・作品ごとに来歴などをまとめたファイル
- ・国吉が出品した展覧会の図録
- ・スミソニアン・インスティテュートが保管する資料のコピー（1990年代、国吉康雄美術館がスミソニアンの許可を得て複写したもの。現在、その原本の多くはArchive of American Artにて保管されている）

などである。なお、このアーカイブの詳細については別稿で述べることにする。

⁵ 国吉康雄美術館は、株式会社福武書店（現 株式会社ベネッセホールディングス）が岡山市の本社ビル内で運営していた美術館。同社所有の国吉康雄の作品や資料の展示・研究を行っていた。1990年設立、2003年閉館。

⁶ たとえば[24]の日本評論新聞については今回の調査においてほとんど情報が得られず、紙面の検索も不可能だった。

⁷ 『国吉康雄の帰国 没後40年・生誕地記念碑完成記念誌』第1回 国吉アート・フォーラム実行委員会、1993年

⁸ 国吉康雄生誕地記念碑は、1993年、岡山市北区出石町の国吉康雄生家前に建てられた。国吉が描いた牛と少年のイメージをモチーフに彫刻家金谷哲郎が制作した像が据えられた。2020年2月現在、移設中。

⁹ 小澤善雄（1993）「国吉康雄と日本」、『国吉康雄の帰国 没後40年・生誕地記念碑完成記念誌』、第1回 国吉アート・フォーラム実行委員会、1993年、p.1

¹⁰ 『国吉康雄美術館報』3号、国吉康雄美術館、1993年

¹¹ 2019年9月、江原から小澤律子への聞き取りによる。

¹² 国吉の展覧会目録およびパンフレット、『YaSuO画集』については、雑誌ほか印刷物に含めて計上した。

¹³ 刊行物での掲載例としては、『国吉康雄展』岡山県立美術館、2006年、p.103

¹⁴ 妹尾克己（2009）「資料紹介 国吉康雄の義理の妹たちへの手紙と写真」、『岡山県立美術館 紀要』創刊第1号、岡山県立美術館、2009年、p.35

¹⁵ 刊行物での掲載例としては、『YASUO KUNIYOSHI ネオ・アメリカン・アーティストの軌跡』、福武書店、1990年、p.10

¹⁶ 『アトリエ』等の編集者、藤本紹三は後年テレビ番組でのインタビューで、国吉が同展の受付にいたことを証言している。（山陽放送『国吉康雄の世界』1982年）

¹⁷ 妹尾克己（2009）「資料紹介 国吉康雄の義理の

妹たちへの手紙と写真」、『岡山県立美術館 紀要』創刊第1号、岡山県立美術館、2009年、p.27

¹⁸ 「美術界雑誌 昭和六年十一月」、『美術新論』1932年1月号、美術新論社、pp.6-7

¹⁹ 岡長平（1977）「カフェ・ブラジル」、『岡山始まり物語』（岡長平著作集第2巻）、岡山日日新聞社、1977年、p.183

ほか明治製菓売店については、橋爪紳也（2006）「食とビルディング」、『モダニズムのニッポン』角川書店、2006年を参照した。

²⁰ 1932年1月16日、中国民報

²¹ 久保貞次郎（1948）「われらのクニヨシ」、『美術手帖』1948年8号、美術出版社、p.5

²² 『ISHIBASHI COLLECTION 1996 II』、編集・発行：財団法人 石橋財団、石橋財団ブリヂストン美術館、石橋財団 石橋美術館、1996年、p.79

²³ 東京文化財研究所のホームページで公開されている「東京文化財研究所刊行の『日本美術年鑑』に掲載された彙報・年史記事を網羅した」データベース <https://www.tobunken.go.jp/materials/ny/1940/page/2>

（2019年11月アクセス）

²⁴ 仲田菊代は二科会にも出展していた画家であり美術評論家仲田定之助の妻。仲田菊代は戦後にも国吉と文通を続け、1948年のホイットニー美術館での国吉康雄回顧展、1952年のカーネギー美術国際展について国吉とたびたび手紙を交わしている。

²⁵ 『第二十回 二科美術展覧会目録』1933年、二科會（『近代日本アート・カタログ・コレクション』038、二科会目録編 第3巻 東京文化財研究所編纂、株式会社ゆまに書房、2002年に集成、pp.403-404）

²⁶ 『第二十九回 二科美術展覧会目録』1942年、二科會（『近代日本アート・カタログ・コレクション』041、二科会目録編 第6巻、東京文化財研究所編纂、株式会社ゆまに書房、2002年に集成、p.277）

²⁷ 『第十九回 二科美術展覧会目録』1932年、二科會（『近代日本アート・カタログ・コレクション』038、二科会目録編 第3巻、東京文化財研究所編纂、株式会社ゆまに書房、2002年に集成、p.246）

²⁸ 「二科美術展覧会規則」第二章。『第十九回 二科美術展覧会目録』1932年、二科會（『近代日本アート・カタログ・コレクション』038、二科会目録編 第3巻、東京文化財研究所編纂、株式会社ゆまに書房、2002年に集成、p.320）

²⁹ Kuniyoshi, Y (1932) "Art and Artists in Japan" *ARTS WEEKLY*, vol 1, no.7 (April 23, 1932) p.150

³⁰ 1935年8月17日、読売新聞「更生二科展／アメリカ進出／二科賞も今秋から復活して／在野畫壇に氣

を吐く」

³¹ 有島生馬（1934）「初めて國吉君に逢つて」,『中央美術』, 中央美術刊行會, 1934年6月号, pp.40-42

³² 小澤善雄（1993）「国吉康雄と日本」,『国吉康雄の帰国 没後40年・生誕地記念碑完成記念誌』, 第1回国吉アート・フォーラム実行委員会, 1993年, p.1